

# マーシャルの銀行信用論

大 原 静 夫

## 目 次

はじめに

### I 商業信用

- ① 地域特化産業
- ② clothier bankers
- ③ 予金銀行

### II 銀行信用

- ① 信用媒介人
- ② 営利の Ethos

## はじめに

マーシャルの「貨幣・信用・商業 (Mcc)」の主題は「社会的進化の可能性」を追求する事であるが、此の第II編で「商業信用」(business credit)が考察されている。

銀行信用が商業信用、あるいは社会的信用 (social credit) に支えられている事は、Bagehot (1826—77) の「銀行券の発行は予金銀行の序曲である。……然し銀行券の発行は侵略を受けない革命のない国でなければ実行できない。現在 (1873年) でもフランスの地方の都会では我国の様な銀行業務は見られず、小切手帳はないし、銀行に当座勘定として保有せられる資金は殆んどなく、人々は金を自家の錢箱に保管している<sup>1)</sup>」と云う記述からも明らかである。

マーシャルは、これを Water protected the Bank of England against the armies of Napoleon (Mcc p. 297) と述べるが、本稿ではマーシャルの「銀行信用」を商業信用と関連させながら検討しよう。

## I 商業信用

マーシャルは「経済の進化は営利<sup>2)</sup>の觀念の発現をその主要形態として居る。これによって各種産業は手段を目的に最も良く適合する様に産業組織を形成する。……殆んどすべての事業には投機的要素が含まれているので大市場に於ては有効確実に其機能が發揮し得るとい

1) Bagehot Lombard Street (宇野訳) p. 85

2) 茲の営利の觀念は後述する様に近代ヨーロッパに特有なマックス・ウェーバーの説く営利のエトスである。

う相互の信認が重要な要素となる<sup>3)</sup>」と営利のエトスによって最良の社会的分業が組織され、それが社会的信用で結ばれていると説く。

更に具体的に社会的分業が形成されるさまを地域特化産業に関連させて「経済学原理」Ⅳ編10章で述べている。

### ① 地域特化産業

E. Jaffe は「イギリスの信用機構を組立てている根本原則は分業の原則である。これはイギリスの信用機構が妨害されることなく発展した事により成立している。……銀行はその中に設立されているそれぞれの国民層にもとづいて非常にゆきわたった分業を実現している。例えばロンドンでは City-Bank は専ら卸売商と金融業者に利用され、Westend-Bank は貴族と利子生活者に、Suburban-Bank は中産階級の貯蓄者と小売商に役立ち、地方銀行は地方の事業に役立っている<sup>4)</sup>」と云う。

少し敷衍しよう。

(a) イギリスでは地域特化産業が広汎に存在する。例えば綿糸紡績業と綿織物業はランカシャーとノールドチェシャー、羊毛工業はヨークシャー、レース工業とカーテン工業とはノチンガム、小さな鉄工業はシェフィールド、大鉄工業はバーミンガム周辺地方、更に細密化して綿糸紡績業でも太糸は北部ランカシャー、細糸は南部ランカシャー、特定の都市 Stockport では特定の番手（100番手以上）、Bolton ではエジプト棉花の番手（60—80番手）の糸が紡がれる等々となっている。

(b) この様に産業が地域的に特化している事は企業の現金出納を取扱う銀行から見れば業務が細密に専門化され、容易に企業の事業内容の良否が判断できる事を意味する。

更に銀行は一定の固定的に限定された事業部門に細密に特殊化しているため生産その他に関する多くの事業部門を信用媒介者（手形仲買人、株式仲買人、商品仲買人）に委ねている。

以上の如き社会的分業の原型は既に18世紀中葉前後には成立している様である<sup>5)</sup>。

この時期は丁度ケインズが古典派学者（マーシャル）が前提して居ると述べたロビンソン・クルーソーの世界であり（GT. p. 21）又 M. Weber が近代経営の原型を問題にした時、たえず念頭にあった世界でもある。

次に項目を変えて当時の商業信用の展開の状況をみよう。

### ② clothier bankers（織元銀行業者）

The dawn of civilization seems to have brought with it some recognition of the

3) マーシャル Industry and Trade (佐原訳) p. 205

4) Edgar Jaffe. Das englische Bankwesen (三輪訳) 以下特に注記せぬ限り茲は同書による。

5) T. S. Ashton. The industrial Revolution (中川訳) p. 110, W. T. C. King History of the London Discount Market (藤沢訳) p. 9

advantages of association and organization in the custody of money and the transference of purchasing power and of credit. (McC p. 295)

(文明の夜明けと共に貨幣の保管及び購買力ならびに信用の移転に関する協力と組織の利益が認識されていた様である) と、銀行の原型は遠くバビロン・エジプトまで溯り得る。

ただし西ヨーロッパで transmission of money が顕著になるのは13～4世紀の分散的な諸地方市場圏の成立の頃である。

則ち「商業資本はこれらの各市場圏の中心に自己の支店を設立し地方間の Konjunktur (商況) のひらきを利用する。……この外に商業資本の亜種である貨幣取扱資本は両替、そのより発達した形態である振替、及び地金銀の取引を営み<sup>6)</sup>」、この様にして「商人は自分の商売をしながら銀行の主要な機能を習得した」(McC p. 71) ののである。

ところで名誉革命前後に各地で簇生する兼業割引業者を一般に clothier bankers (織元銀行業者) と云う。マーシャルの

Bills of exchange could do part of the work without the aid of any formal agencies of credit. But their scope was limited and there remained a great opening for any paper currency issued by people known in each neighbourhood (McC p. 303)

(為替手形を用いれば、何ら正式の金融機関の助けを受けずとも若干、便宜が得られる。然しそれも限界があるので、近隣に声望のある人々が発行する紙幣が流通しうる余地は充分あった) という記述に於ける「近隣に声望ある人々」が clothier bankers に該当する。

少し敷衍しよう。

i) 為替手形の振出し。

商業信用<sup>7)</sup>は単に book-credit として行われるだけでなく traders が「掛売り商品」について手形を受取ったり振出したりする慣習は17世紀末までには一般化していた。

この信用関係は現代的にはラドクリフ委員会報告(1957年)によると

「農産物商は農民信用の重要な供給源である。機械又は家畜については3年ないし4年まで延長される事もある。……商業信用と銀行信用間の選択は便宜性の考慮よりもコストとの競争性によって決定されることが遙かに少い。商社の代表は農場へ来てくれる。

而かも商業信用は銀行貸出を受ける場合の様な公式的な手続きなしに手形の延払いと云う簡単な方便によって入手される<sup>8)</sup>」と商業信用と銀行信用との関係が云われている。

6) 大塚久雄, 株式会社発生史論 p. 31

7) ここに商業信用とは産業者や商人が商品をもって再生産過程の循環内で相互になし合う前貸(掛売り、延払い)を言う。

8) ラドクリフ委員会報告(大蔵省金融問題研究会訳) p. 245



metallic currency, by political security and social credit (McC p. 303)

(信用は資本であると多くの者が考えるに至った。……〔然し〕彼等は国家の金属通貨、政治的保証及び社会的信用によって公費で作ら上げた高価な取引機構の一部を自分が利用している事に考えつかなかつた) と。

即ち、他人から信用を得れば吾人は自己の事業に使用する、或いは他人に貸付けうる資本を支配することが出来る。

そして大きくは輸出競争力を強め国力を發揚する信用機構までも築くことができる。

然し、これはさまざまの段階の信用が積み重って形成されているものであり、その何れかを欠く時、この信用機構は崩壊することになる。

これを端的に証明したのが19世紀に於ける一連の信用恐慌(1825, 1839, 1847, 1857, 1866年)であった。

#### 第2表

1857: Sanderson & Co	……	債務額	£ 5000,000
1866: Overend Gurney & co	……	〃	11000,000
1875: Young Borthwick	……	〃	2,500,000
1890: Baring Brothers	……	〃	21,000,000
(外國為替手形仲買人)			21000,000

E. Jaffe 「イギリスの銀行制度」(三輪訳) p 124.

一般に凡べての信用には投機的要素が含まれているが一連の恐慌は主として貿易業務に携っていた為替仲買人の破綻から生じた。(2表)

そして1825年の恐慌から、後述する如く英蘭銀行の特権を廃止して、予金銀行が発足し、1839年の恐慌によりピール条令が制定されて中央発券銀行制度の基礎が与えられ1857年の恐慌から内國為替手形の減少によるロンバード街の性格の変化と銀行合同運動の展開がみられる等々、信用の崩壊はより信頼し得る新たな信用機構の建設を促進した。

#### ③ 予金銀行

マーシャルが生き生活し、問題にした時代は19世紀後半のヴィクトリア時代であり、Jevons (1835—82) が「インドはわがために棉花を作りオーストラリアはわがために羊毛を切りブラジルはわがために香高き珈琲をつくる。……世界はわが農園、イギリスは世界の工場」と謳った黄金時代であった。

然しながら同時にそれは、1848年の2月革命に敗れ、1849年6月からロンドンに亡命したマルクス(1818—83)が眼の当りに見た社会でもあった。

マルクスは次の様に言う。

「ロンバード街は国内の或一部から有利に使用する事のできる寝かされた資本をこれを必要とする他の方面に移転せしめる中心点となった。…この国の資本が急速に増大し、且つ諸銀

行の設立によって資本の節約が益々著しくなるに従い、割引商会の支配に属する資本も亦益々大きくなった。かくして、これらの割引商会は先ず船渠倉庫預り証を、次には末到着の生産物を代表する船荷証券を担保にとって前貸をする様になった。此の実行はやがてイギリスに於ける営業の全性質を変えた。……この制度の普及は遠隔地植民地に現在・尚、栽培されつつある農作物について取組まれた為替手形に関しても多額の取引がロンバード街で行われる様にした。…地方の子金者は彼の子金が、彼も銀行も何ら管理する事を許されてない所に委ねられていることに些かも思ひ及ばなかった<sup>11)</sup>」と。

少し敷衍しよう。

〔A〕 株式銀行

i) ロンバード街

イギリスでは英蘭銀行以外の「出資者6名以上の如何なる銀行にも銀行券の発行を禁止した」ため、発券機関たる地方銀行は零細な従って局地化された企業 (the localization of country banking) に留まらねばならなかった。

この局地化は経済の発展につれて、資金需要の地域差を生み、これらを媒介する機構としてロンドン金融市場が生れた。

そして工業地方の銀行から回送された手形を農業地方の銀行が予託した余剰資金で再割引するという仲介的機能<sup>12)</sup>は1880年代に銀行合同や支店開設等の運動が局地的銀行組織を破壊し始めるまで約100年にわたってロンバード街の主要な機能であった。

ii) 為替仲買人 (bill broker)

イギリスが「世界の工場」として、ロンドンに殆んど全世界から商品が送られたこと、ナポレオン戦争の被害を恢復するためにヨーロッパ大陸諸国がロンドン市場で公債を消化した事などに依ってロンドンが全世界の金融市場の中心地となると共に、漸次ロンバード街は貿易業務に携る様になった。

此の場合、銀行は原料生産物および半成品例えば羊毛、コーヒー、砂糖、棉花、小麦、銅、銑鉄、綿糸、亜麻布——これらの大部分は著しい価格の変動にさらされている——及びロンドン株式取引所を市場としている数千種の外国の有価証券の良否をいちいち判断することは不可能であった。

そのため「特定の為替手形によって代表されている生産物、例えば西インドの為替手形のみに注意を向ける、又は棉花為替手形のみを売却する<sup>13)</sup>」専門化した bill broker に銀行は、

11) マルクス 資本論Ⅲ 31章 (高島訳) p. 38

12) Bagehot 同上 p. 22

13) Jaffe 同上 金融経済 30号

為替手形の良否の判断を依存しなければならなかった。

そして彼等 bill broker を発端として約10年毎に恐慌がおこり、1825年の恐慌の結果

At length the clause in the charter of the Bank of England which had prevented the foundation in England of banking partnerships with more than six members, was scrutinized: and it was found to apply only to banks which issued their own notes payable on demand. So joint stock banks of the type now common in England were founded. (McC p. 305)

(遂に6名以上の組合銀行を英国で設立する事を禁止していた英蘭銀行条令が精査され、此の規則の適用は単に要求払の自行の銀行券を発行する銀行に限ることにした。その結果今日、英国に於て普通見られるが如き株式銀行が設立されることとなった)

これにより1833年に銀行券を発行しない——従って予金で資金運用をする——株式銀行をロンドンに合法的に設立することが認められ、London & Westminster (1834年) London Joint Stock (1836年)、Union & London & County Bank (1839年) が設立され、その後7年間にイングランドとウェールズで87の株式銀行が設立されている。

#### 〔B〕代用貨幣

##### i) 利子附資本

高利貸資本とは自己資本を運用し、両替・振替・送金等の業務を主とする貨幣取扱資本であり「近代的銀行」とは予金(他人資本)を受入れて貸付け、双方の利子の差額を利潤として獲得し、従って低利でも資金量の拡大によって充分、利潤を稼得しうる利子附資本のことである。

予金銀行の設立により、予金吸収のため予金に金利をつけた為に予金をする習慣が社会の各階層に普及した。

「最近イブスウィッチ地方の小作農業者や小商人の間に此の習慣は4倍の普及を来たし、殆んど一切の小作農業者達は年£50の地代を納付するに過ぎぬ者でさえも今や銀行予金を有する<sup>14)</sup>」ことになった。

莫大な遊休資金が活用化された為に金利は低下し19世紀下期のイギリス産業の飛躍に大いに貢献した。

##### ii) マーシャル k

預金銀行の設立に伴い銀行券に代って、手形・小切手・予金振替等の代用貨幣が益々、流通するにつれ、取引高(輸出)の伸長にも拘らず現金が収縮する事態を招来した。(3表)

14) マルクス 同上 p. 37

これは貨幣数量説の批判——通貨学派と銀行学派の論争，流通速度，その逆数としてのマーシャルkの解明等の問題を生んだ。

3表 イングランド銀行券の動向

年度	銀行券						輸出高 千£	
	£5～10券		£20～100券		£200～1000券			総計 千£
	£	%	£	%	£	%		
1845	9,698	46.9	6,082	29.3	4,942	23.8	20,722	60,110
1854	10,565	51.0	5,910	28.5	4,234	20.5	20,709	97,184
1856	10,680	54.4	5,645	28.7	3,324	16.9	19,649	115,826
1857	10,659	54.7	5,567	28.6	3,241	16.7	19,467	122,155

マルクス資本論Ⅲ巻(下) (高島訳) p63.

茲で当時の論争で現代にも通ずる具体例を1つ論じよう。

銀行学派，トウクは「発券銀行は，それぞれの地域に流通する銀行券の数量を増加し得る力を持っていない」と述べた。

これは「当時，議会の委員会に召集された地方銀行家たちの一致した有名な保証によって外観上の証明を受けている<sup>15)</sup>」がマーシャルはトウクの命題を「地方銀行（発券銀行）券にはグレンシャムの法則と正反対の傾向が作用するからだ」(McC p. 61) と述べている。

ヴィクセルは更に詳しく「問題はまさに地方銀行であったのである。もし地方銀行がその銀行券を過度に増大すれば，これらの銀行は地方的な物価騰貴を惹きおこす。かかる物価騰貴は問題の地方に対する商品移入を増加せしめ，ロンドンに対する移出を減少せしめる。

これに依って此の地方の支払収支は間もなく逆調となり，……地方銀行はロンドン宛の手形，又は小切手の振出を要求される。」

その結果，地方銀行券は駆逐されて，地域的な発行過剰は是正されると言う。

トウクの命題を現代の問題に則して言えば例えば昭和36年1～6月の広島地方に於て，広島地方の産業が発展し，東京大阪方面への商品仕入超，出金超

千万円

(送金超153 = {27,119 - (11,163 + 14,423)})となれば地銀の現金回収状況は悪化し

(4表)，日銀貸出等の外部資金が得られぬ限り，地方産業の成長は阻害される事を意味する。

15) ヴィクセル 利子と物価 (北野，服部訳) p. 124



4表 H 行 資 金 状 況 (月中) (単位百万円)

		廣 島		東 京, 大 阪		
		現 金 回 収	手 形 交 換 尻 (負) 為 替 尻 (勝)	手 形 交 換 尻 (勝) 為 替 尻 (負)	手 形 交 換 尻 (勝) 為 替 尻 (負)	
36.	1	(1804) 1,911	(1,643) 2,025	1,586	1,784	4,159
	2	(-296) -646	(1,610) 1,281	1,973	2,025	4,009
	3	(-623) -961	( 157) 978	2,136	2,637	5,110
	4	(-837) -333	(2,525) 920	1,711	1,890	4,283
	5	(246) -63	(1,226) 2,150	1,785	3,856	4,997
	6	(-831) -1287	(1,002) 1,324	1,972	2,231	4,561
	計	(-537) -1379	(8,163) 8,678	11,163	14,423	27,119

註 ① 現金回収欄 (-) は日銀からの持帰超, (+) は持込超

② ( ) は前年同月の計数である。

## II 銀行信用

銀行業務は (イ) 貨幣取扱業務 (transmission of money) と (ロ) 貨幣貸付業務 (deciding to whom it should afford credit) とに二大別されるが、これからは後者を考察しよう。

The rise of manufacture to a chief position in the world of finance was due to the fact that, while in former ages constructive imagination was the task of the merchant, who gave out his orders to handicraftsmen, the modern age requires that task to be shared between the manufacturer and the merchant (McC p. 72)

(製造業が金融の世界で主要な地位を占める様になったのは、曾ては建設的な想像企画という事は手工業者に注文を割当てる商人の任務であったが今日では、この任務を製造業者と商人とが分担しなければならないと言う事実に帰因する) と。

マーシャルは社会的に企画・調整 (constructive imagination) を任務とする者に銀行信用は授与されると説く。

この関係を次に考察しよう。

### ① 信用媒介人

イギリスに於ては「特定の地区に同種の小企業が多数集積<sup>16)</sup>」している。

この立地条件に応じて既述せる如く例えば地方銀行も工業地区にあっては中部地区の鉄鉱業 (Birmingham, Sheffield), 北西地区の紡績業と機械工業 (Lancashire), 北東地区の羊毛業と石炭鉱業 (Yorkshire, Northumberland) 等に於ける銀行に細分されている。

16) これは我国でも、例えば、瀬戸の陶磁器、輪島・会津の漆器、行田の足袋、燕の金属洋食器、三条の金物、尾西の毛織物等々同じことである。

i) 外部経済 (external economies)

マーシャルは同種の小企業が多数、同一地区に集積することによって得られる分業のもたらす効果を外部経済と呼ぶが<sup>17)</sup>、1870 年代以前に於ては5表の如く金属工業は小規模の手

5表 英国の金属工業事業所数および平均雇用労働者数

	事業所数	労働者総数	雇用労働者数—工場当り平均
全金属工場	18,000	622,000	34.5人
製鉄	761	166,700	219
鉄船製造	78	44,500	570.5
機械製造	1,933	163,600	85
釘及びリベット	1,604	13,200	8
刃物・やすり道具	1,143	24,600	21.5
その他の金属製造	7,900	75,400	9.5

clapham op. cit, II p. 117 (1870—71年)

工的経営が圧倒的であった。(一工場当りの平均34.5人)

猶、末尾の三つのグループは Sheffield, Birmingham, 及び Black Country の工業をあらわして居り、茲での機械工業は各工種ごとに分立した小作業場によって特徴づけられ、この工業の発展は個々の企業規模の拡大 (internal economies) に依ってではなく、企業数そのものの増大 (external economies) に依って実現される状態であった。

ii) 結節点 (node)

外部経済の利益は市場に於ける需要の多様性にもとづく、多様な製品を生産するために、中小零細経営が地域的に特化して営む社会的分業がもたらす利益である。

従って、ここでは多様な需要と多数の生産者とを結び付ける結節点 (node) を必要とする。此の node の機能を営むのが問屋である。

彼は市場に於ける需要に応じて生産者に発注し、社会的に constructive imagination の任務を遂行するが、彼に銀行信用が授与されることになる。

(i) 地域的 node

Jaffe は言う「銀行のほかに特殊な範疇の信用仲介人がある。例えば木綿工業での糸代理人及び綿布代理人のように。……織物業者は銀行からの対人信用が充分でない時には、更に商品信用を必要とする。織物業者はこの商品信用によって完成品と半成品との形態にある金額を実現することができる。

ところが銀行はこの様な商品の現実的な価値を判断することはできないから商品信用を余り喜ばない。

そこで織物業者は上述の代理人の所に向う。

彼等 (代理人) は当該の特殊部門に於て業務を行ひ而も業務を個々の僅かな工場の製品に限定しているから、この様な製品を厳密に知っている。そこで代理人は織物業者にその半成

17) マーシャル Principles of Economics p. 277

品ならびに完成品を担保に貸付けることができる。

ところで代理人自らは、この様な貸付けのための資金を大部分、銀行から代理人に個人的に与えられる信用の形態で再び得る<sup>18)</sup>と。

即ち特定地域に集積している木綿工業に於て結節点 (node) としての機能を果している代理人 (問屋) に銀行信用が授与されている。

(四) 業種的 node

6表 広島県輸出状況 (百万円)

		輸 出 額 構 成 比 (A)	%	全出荷額 (B)	A/B %
織	維	5,333	16.9	17,174	31.1
機	械 工 具	1,822	5.8	114,619	1.6
金	属	925	2.9	46,208	2.0
船 舶	プ ラ ン ト	18,819	59.8	41,502	45.3
木竹紙	パ ル プ	222	0.7	36,727	0.6
雑	貨	3,154	10.0	13,968	22.6
化	学	538	1.7	26,846	2.0
食	品	670	2.2	50,831	1.3
計		31,483	100.0	347,875	9.1

昭36年 (1~12月)

広島県統計

7表 広島県 (輸出) 外国為替取扱高  
千ドル

37年/月	金 額
4	169
5	91
6	103
7	171
8	124
計	658

日銀広島

海外の顧客からの注文を国内の輸出業者に結び付けている貿易商社も、社会的には地域特化産業に於ける問屋と同じ様に constructive imagination の役割を果している。

ただし此の場合、例えば広島地方に於て、昭和36年の県輸出総額は315億円 (6表) であるが、そのうち県内業者が直接・海外のバイヤーと取引しているものは約5~6億圓に過ぎず (7表) 他はすべて、神戸港、横浜港、名古屋港等の貿易商社を通じて輸出している。

従って地域特化産業に於ける問屋が特定地域の業者を結集しているものとすれば貿易商社は特定業種の業者を結集しているとも言えよう。

② 営利の Ethos

周知の如く19世紀全体を通じて製造業者の地位が向上し、constructive imagination の任務を遂行する担当者が商人から漸次、製造業者に移って行った。

i) 内部経済 (internal economies)

1870年以降の英国産業を概観すると19世紀の主要産業であった綿工業が1880年頃から停滞傾向 (8表) であるのに対し、鉄鋼業では1878~1898年の20年間に約4.5倍の躍進を示している。(9表)

18) Jaffe 同上: 金融経済30号

8表

年次	綿糸生産高	スピンドル数	1スピンドル 当り年生産高
1844~46	523(百万ポンド)	19.5(百万錠)	26.8(ポンド)
1859~61	910	30.4	29.9
1880~90	1,323	42.0	31.5
1896~1900	1,576	42.2	37.3
1906~10	1,707	54.1	31.6
1910~13	1,964	58.2	33.7

田中穰「英国綿業論」 P 29

9表 英国における鋼鉄生産高（千トン）

年次	ベッセマー法	平炉法	塩基法	計
1878	800	174	—	974
1883	1500	455	121	2126
1897	1396	2432	729	4557
1905	1129	2583	1215	4927
1910	1138	3073	2219	6430

Clapham op. cit, II p58

10表 1908年に於ける銀行別支店数

1	London City and Midland	630
2	Lloyds	537
3	Barclays	476
4	London Country and Westminster	307
5	Capital and Counties	253
6	National Provincial	247
7	London Joint ST.	234
8	United Counties	193
9	London and Provincial	186
10	Parr's	185
11	Manch and Liverp District	184
12	London and South Western	177

Von Wieser Der, Finanzielle Aufbau der  
englische Industrie S. 259

これは金融面では

Local disturbances of credit and of economic activity are increasingly associated with, and even dependent on, fluctuations of general confidence and activity in national industry and trade (Mcc p. 86)

（信用ならびに経済活動の地方的混乱は、一国の産業及び貿易上の全般的な信用ならびに

殊にベッセマー法と外国鉱石の輸入とはその産業組織を根底から再編成した。則ち転炉経営では銑鉄を熔解したまゝで高炉から取出すことのできる混合的あるひは垂直的結合工場の方が従来の純粹の製鋼所より著しく生産上の利益をあげるようになった。

そして、この頃から交通機関の発達、製品の標準化等と相俟って外部経済よりも内部経済が著しく重要性を高め地域特化産業 (localized industries) はいわゆる地場産業に停滞するものと国家的あるいは世界的産業に躍進するものとに分解した。

活動の消長に関連することが益々多くなり、又は全く依存することさえある) ように変化し、局地的市場圏が国家的市場圏に包括されるにつれて、局地的な地方銀行は銀行合同、支店開設等により国家的なロンドン＝地方銀行に再編成されて行った。(10表)

ii) 職人あがりの経営者

The old families of business were being supplanted by new men who had risen from the ranks of artisans, or whose fathers had done so; and who wanted fresh capital at every step of their upward career (McC p. 303)

(由緒ある実業家の家庭は職人あがりの或ひは彼等の父が職人であった新人にとって代られた。この新人は社会的地位を向上させる毎に新資本を必要とする人達であった)。

彼等、新人は「夜明けの三時から仕事に精を出す<sup>19)</sup>」、活気に満ちた連中で、凡ゆる人間的感性的欲求を抑えて「営利の Ethos」を追求する人々であり、M. Weber は彼等の中に「資本主義の精神」を見出している。

かかる「資本主義の精神」の体現者が constructive imagination の任に当る時、資本と労働とは彼等のもとに集る。

マーシャルは「産業貿易論」(Industry and Trade) で言う。

「敏腕家の経営する大事業が其周囲の直接・間接の援助を離れて独立し得るに至れる原因は資本の調達が可能となる事なり。

大会社が500万円の社債を起すは此の会社の10分の1の規模の会社が10万円の社債を起すよりも容易なる事あり。

何となれば此の会社の成績、極めて良好で且つ経営の任に当る人に対する一般世人の信用厚く、その有能な事を確信するためである。而して、かかる場合、資本はこれに対する需要よりも遙かに急速に増加するため、之を運用する手腕・力量ある人は何時にても容易に之を調達することを得べし<sup>20)</sup>」と。

以上、一般世人の信用を得れば資本は容易に調達できるが、これは経営者が宗教的・倫理的理念にうらづけられた「営利」を追求し社会的に constructive imagination の機能を果たすからである。

そして社会的分業を形成する動因として、更に、商業信用、銀行信用の根底に宗教的な営利の Ethos がよこたわっている様である。

(1972年1月)

19) 大河内暁男 近代イギリス経済史研究 p 138

20) マーシャル Industry and Trade (佐原訳) p 210